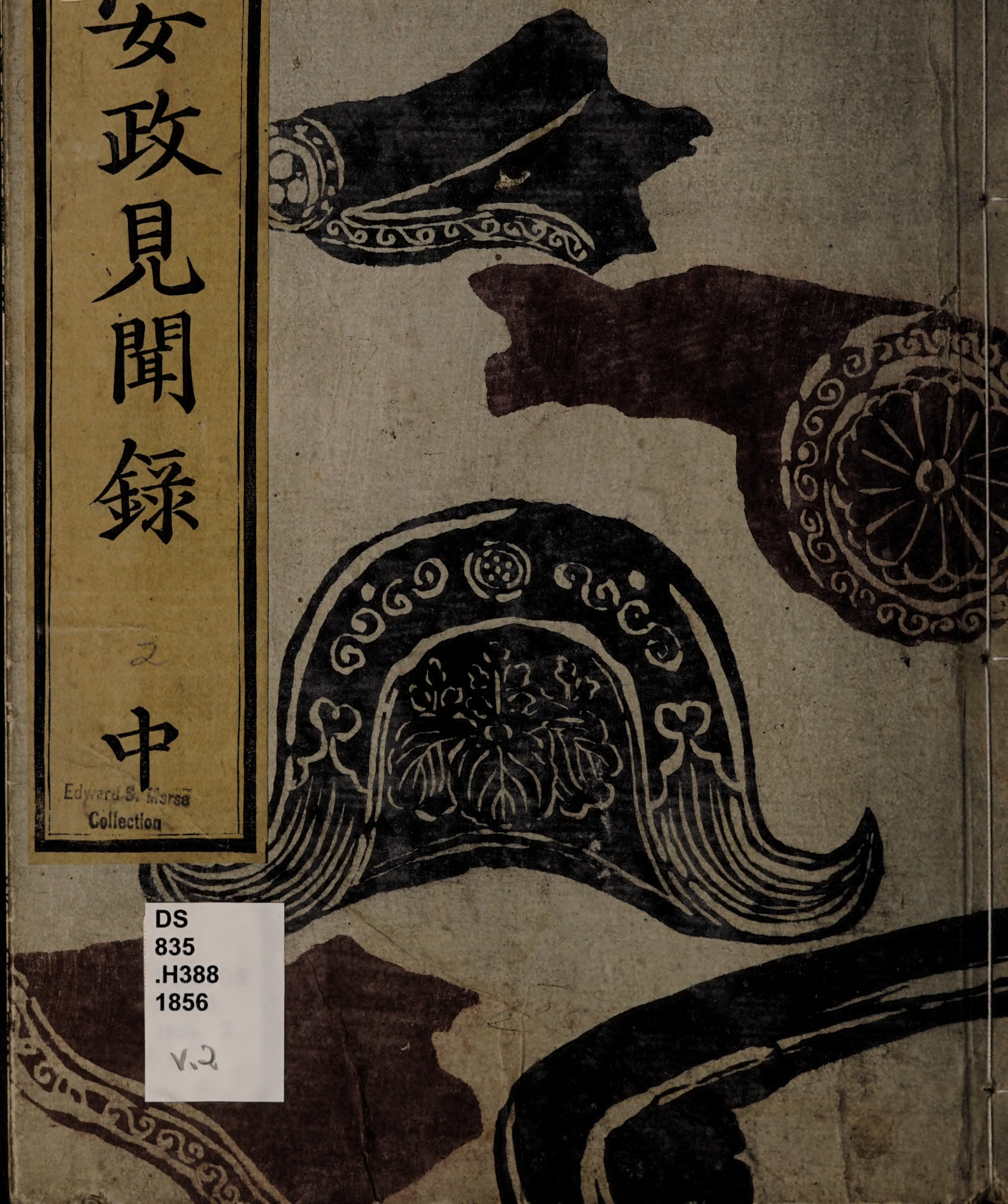
安政見聞録

2

中



安政見聞録巻之中

○両親を見捨て禍にあふの條

諸国地震の物語を聞に或ひハ地裂け山崩れまた川筋の変る所あり。またハ陸地海中に陥り。或ひハ高き所低くなり。また穴平地に水湧出て邑落ハ埋りしするに足らん。然るに江都ハ往古より。かゝる変異あることなし。昔書巻にもみゆる所。江都の地震いと稀にて往古元禄十六年。大震のありしと聞けど物に記るせるハ白石先生が折たく柴の記に甚しきことを書れしのミ。されども市中のさまハ何れより何方へぬけて多く壊れしなども記さず。さて先生一家の記居。且八代洲河岸へ往んとて小路出らるゝに道々の武家町家も戚く崩れ挟して衝ゆへ人も多く遠方に

蚊などのむらがるごとき多ければ人の噂くさ〳〵なりし。かくて神田橋の外方に到り。門人ハ出会て馬を備る。夫より八代洲川岸の殿に詣づ云。と記されるのこ。當下諸方より火なんどの起りしとりみともえたれハ大震あつて家藏まで必大災発るて。都鄙ともにことに然り。さればこの時も許よりして。失火ありしのなるらん。白石先生その頃ハ湯島天神下に居のよし。さて大地震ひ出し。屋舎揺るて塀まで。猪牙舟に在るがごとし。然までも家を出れバ。小塀の崩まで落るに及び。ことに庭にぞありし。小塀崩まで落ざる以前。屋根損て池出まで。瓦その他の物落て却て怪我をするもありしとぞ。宜なる哉。遠回の地震にもこの類ひ多くあり。本所に住る何某なるもの。支拝に女子一人ありて。僕一人を使ひけり。この地震のとき親子三個。ことに家憩ことしが驚きたる所。両居

ひらきて出んとするに掛鉄固く頓に開ず。其時下僕も驚き覚て。己が部屋口なる開き戸を。押あけて逃出るを女子は目ざとくこれを見つけ。一人其処へ逃出して。其開戸より対面へ出隣の方へ逃んとして。土庫の間を通るに。其時土庫たちまち崩れ。かの鉢巻と唱ふる土の。ざらくと砕け墜て。女子が頭上を打れけり。女子は堪へず其処へ伏にしき。土瓦礫が上に落重なりて声も出さゞれ。その侭其処に死てげり。さぞ手土を取除ゑるに。女子は両眼飛出し。七竅より血を噴て。うち一遍られなるさま見えるに。気も顛し心惑ひ。両親は狂気の如く歎けども更に甲斐なし。個當下両親は掛鉄の緊しくて戸の開かねる間よりて左右をるまに震は止ねど。ふ於て恙なく。是より其家も潰れざるに。女子はいちはやくかの僕が出るを見て郷導を得て隣の方へ遁んとして郡く

安政見聞録　服部 識

命を喪ひしハもつとも哀る過なり。僕ハそれより猶疾き者あり。いまだ臍の落ぬ間に通りゐて慈す。かゝる歎ひも多くありて各時の然らしむると。一様にいひ做せど按るに然ふあらず。人の子として両親の惑ふを見捐閑戸の明るをまえて己のミ走りて難を遁んとせしハ第一孝心の薄きならずや。この巻首に記しゝる千住の嫁といへる表寰之この女子両親の傍にあらバ諸共に慈なりを遁さんとして身を過つ人の亭子なる者ハよく是を鑒むべし

附ていふことふ奇しきとあり。江都の近郊上平井ハ聖天宮鎮座在て都下の老若春秋ハとくふ歩行をもとゞめの多く。人のよく知る所也。この地震ふて裂るゝこと三町余幅凡そ二間ばかり。深さ数丈といふを知らバ適民家この上に在るものハ半ていふ不埋ふまとり。況んや

衣類調度の類ひ漏るゝものハ出る物なし。すでに新吉原の日本堤
隅田川の堤も裂ひらけありしかども広大なれバ、その余ハ人力をもって埋
立たる地或ひハ築出せし封疆など、年旧りたる地面なるものなど
も多く損ぜざるものなり。この上平井もそのむかし川なりしを埋たし
なり。但しこのほとりに近くハ知らざる人もありけれバ、かく広大にハあ
らざりし。行程さのミ遠きにあらねど行て看ざれバ、伝へ偽ハあら
ん。但是とても上古を考ふるに、日本紀天武天皇七年筑紫の国地
裂ること広さ二丈長さ三千丈民屋多く仆壊す。この時ある百姓
家岡の上に在けるが、その岡崩れて移遷る。然れども家ハ全し。
家に在しものこれを知らざれバ、夜明てこれを視て大に驚しとなん。又
同十三年の冬地震して山崩れ諸国寺塔舎屋破壊して人民



月岑輯



六畜多く死ス。伊豫の温泉没して出ス。土佐の田苑五十余万頃
ことごとく没して海となる。この夕鳴動あり。鼓のごとく東ス鳴る。伊豆の
海の西北二面自然に増益すること三百余丈さらに一ッの海となる。
鼓の如くなるハ。神志の島を造る響きなりと云云。これによつて古代よりあれども
その書を觀て識るのミ。寛政年中吉岡元稠と云る人の著し
たる土の槃といふ書に載る。薩摩國出来島の條に過し年（按るに安永年間）
當國の櫻嶋大燒の後その海中時々沸騰して海水沸上り。海面
に火燃出で。大海の水ことごとく變湯となり。海中の魚類大小
の差別なくことごとく死せり。その海の沸騰せる勢ひ凄じく百尋に
餘れる海底より土砂沸上り。新に七ッの島を生ぜり。その第一に
大なるハ一里七合廻り。その外ハ一里半。或ひハ一里ばかりともいふ。その後海

中の変結りて彼島ハまりて塵土となる。故め八島に草木も
なく。満面白砂のごとくなりしが。何方ともなく鳥来り栖むにて
草木次第に繁茂し。清水を湧出せしと見えて隅々より
新嶋に営居を建て守護をなせば。余諸の人も来り頗て
人の住居となりしん。この桜嶋も昔養老二年。この海燃て天地晦冥
し。一夜の間に周囲七里の高山湧出て桜嶋と号く。此嶋今
ハ人民多く。田畠も悉く饒え。この嶋の外二ッの小嶋あり。これハ安
永年中の比出来りしとぞ。嶋ふ号等のこと人に語るに絶えざ
るよりの平ありしかども広き世界のことなしとの事ハ経がたし阿
蘭陀より日本へ来る海中に一大国ありけるが先年海中に沈入りとも。
今いづこの国にあるとも高山の嶺二ッ三ッ所々海面に出没せしといふ新

は出来ぬ為なれば。まこと沉ぬる事もあるべし。夫地の機関何の[illegible]とせん。されば地震は拘らざるといへども。筆の序にとて不附言は

○地震によりて虎豹の肉を脱する條

古人のいはく。己れを三軍にわするゝ者は。泰山前に崩るゝとも目瞬かず。麋鹿前に進むとも。更に恐懼の色なくして。以て軍を指揮すべしと。これ他なし。その心を動ぜざれば。胸中昏瞑して縁針の定らざるを識むなり。常人かくの如くなるべしといへども。平生これを心にかけて物に惑はぬぞ。危急にあたりてよく計らへて丈夫といふべし。その心がけなきときは魂身をうしなひて前後を失ひ。後悔およばざる物なり。慎べし。急火の時は除こそ。肝要の物を捐。或ひは古下駄の類ひを身不斷で火を避るあり。これ騒乱不心悪ひて。その元来を失ふなり。

りは貧窮の者なりしも。古下駄は勝る。家職あらんや。ことごとを
忘れて目に觸る。粗物を先にするとハ魂ともあらざるなり。
されバ大学にもことを教へて心焉にあらざれバ見れども見えず。
聽ども聞えず。食へども其の味ひを知らずとへ。心をとゞめて極
まる所あるべし。その正しきを得ずとも見えたり。こゝに深川扇橋の
ほとりに幽なる活業して世を送るものありしが。ひとすけき借屋
に居たり。然るに遠田の北農にある讀ぞ外方へ逃出んとする
時禍の上は汗衫落ち脱のあらりて捲まれて出ることを得ず者
しく居たり。折からその隣家及び。辺りのものども外方へ逃出く
責くし安否を問ひ訪ふ所に。この男妻をあげて救けくれよと
叫ぶを聞。こゝな近よりてみれバ胴より上ハ外にあり。それより足

腿の疵より挟まれてあるなれバ救ふハ容易き業なりと忽地七八個より集合かの男の前後を抱く。男もえいと腕まえしと人々が抜れまいと手を伸て人々ハ挽づりなり。人々ハ力を究めて渾大勢の力を不ひかへて。矢庭にこれを曳出しけるなれバ。左右なる膝へ腕出けるとぞ。鳴と裂に挟まれて。木の楔股に喰ひ入けるを力に任して曳だしたまへバ股より足の甲に及び肉へ疵まで。破方ハ裂けて白骨のこ些細ふありて。血の流るゝを滝のごとく。嘘き苦しむさま大かたならず。その妻子もありけれバ助くれよとうち歎び泣よびけるにこの躰を見れバ更にまさる驚き呆れて。いかにとも術をうしなひ。かの救ひゐる人々も只管に呆るのみ。漸やうのあらざれバ。まづ〳〵死人ハ專らき。怪我人を扶け救て。医師よ薬とよ喋げど何方も騒ぎの

中なれバ。薬も治ハ医師も来バ。よしや手医師の来るとも。こまらせて
療する術あるべきや。かくて怪我人ハ指めこそあまた。衛くれ痛で
苦を覚えて。狂ひ叫び泣悲しむ。至ていまぞ釈氏の方便地獄変相の
図に画きたる。剉碓焼磨に枷鎖よりて脳血の流る法をもてあげ
て頭つよく叩き顔面を裂るなどハ骸に深ぎる所もなし。目鼻にさへ割
るゝまで鬼が人を殺しくるしむるより後初に見る婦女子等ハ決て識
慄ざるものなし。かくてその次の日ハ狂ひ死ハ来りけるに。こまで旅
の幸くより心ぐるしのあまりにより。箇様の誤りて仕出だしなりしぞ。その
人ハ邪法を伝せん教へとて帰する者七八個のそのうち二三箇計の
一心着ぎる愚人のことハいふにあらざるべけれど。その身も大きに恐懼して。
ますます心念に覆さん。頭に周章慌くまうふ。前後を顧る結果陰

まで逸早く曳出さバ助かるべきものと覚しなり。手中にて一個是
を顧るものありて。遁あらんことを察し落る砂を揚るあり。其の数
人の膂力をもつてしても容易きことならんを。然るに心の悪くして一変
を暮れせしむるハ歎息に堪ざるべし
接るにも及ばず。一心周章援はつきて才力勝こそ働ば。
故に湯を汲て沸を止めんとし。薪を抱えて火を救ふの。拙策ある
ことしかし。されバ幼より学問を勉め。和漢の先蹤自他の治
乱を覚る先急の場に在ても胸に浮むで智者といひ英士とも称
ふべき之間て余平生に以前を平紀に載られ夜川の棚敗と安
倍貞任軍済もぞ。被害に及びしとき義家朝臣矢を番ひ逃る千
あがくは荒にふ「衣のたてハ綻びにけり」と貞任と是を顧こそ「年

を経し余の紀しの者しるかと謝しぬれば我家盛ど。その志を慎し
し寝て畜ひる矢を沈め。その舌まく逃のうへにしぞ我家は勝軍にて。
心も勇こ。そのうへに優美の大将に生まれば。簡計つるのつきざれ
然もあらん負任既に棚を破られ心に怨怖を懐くのよう。
この一矢を放られれば一命も既に絶んとせしとの期に及びて心擾
まじば。菅位卿妙の句を詠る。実に英雄の域に入らざる際し
てなりがたき業なるべし。むかし寛文元年正月十五日。京都大火あって
大内および公卿の第宅多く焼る。その上兄清水谷大納言。風
早参議など。こなたに火を避て呻吟の声。道もせきと行あへば
しれ。清水谷に至て「風早と吟もあそうえの火や」とすぐ
られ言ければ。風早参議しうあへば「清水谷とて焼る

残らずと對へて立別れしとぞ。公卿ハ常に歌道を学び書他坐外にくるしみへび胸臆にあるをもて。かゝる騒擾れ時といへども従容見猶ドーのよくなり。常に心にかけずして。平生の詩に縁りべき。されバ萬事常々の心得にあるべきことなり

○流言を信ずれバ禍を招く條

余が知己なる人聖天町某方に。下駄傘など商ひて。丈輝と下人一個を召仕ふ。然るに此夜地震にあひ。且この近き辺猿若町より出火して焼失なり。既に其芝居町残らず僅五六間。表田町辺へ焼来れに付。火を遁れてありといふ。其余焼亡に及びしかバ。偏方に飛散りて。聖天町辺の小家の軒へ火の付る心地なりしかバ。彼下駄など商ふ雄士ある宅を走り出。丈輝手を携えて。川の辺りへ逃出るが。其近辺の人々

ぞこまで船にうちのりて向島へ火を避る。この変報に猿共は船を雇
ひて彼処へ逃されり。初音の方はいづれなるぞ。その夜を明しけるが大
かた猿まりけれども、是や我が家は焼つらんは推しも違ふなかりけり。
若鉄砲なども遺りてあるべし。拾ひとらんと思ひつゝ、ふたゝび船にうち乗りて此
方の岸に揚りつゝ、芝居町裏ものうしろ、堺町の西側へ。然して出
されども彼雄士は東側なるによりて、煙りからもこゝへ来りまじ。又かへ
るよりまづ更に家を拾ひし、一心地して。我が家の門に至りて。箇所
て猿様のあらんと知るべ。猿箱ありとも持出さんを怖りに猿
の急なるに又べ。周章て身一ツ逃出しつるなり。あはれ純なり。今は大
かた猿てあく。納の為に奪はれぬらんと後悔して戸を引あけ
猩に入りつゝ右へ左へ見るに、背に出る時のまゝにて、塵ばかりの


震後大津浪の図



ものも失ふ。適ハ絶て不測なり。是を聞近く火災あり。覆て
逃るゝ之ハ僥倖にして焼残るとも。家財ハ大半焼のこゝなれ。
まゝてものしらずく。然るに貴翁の祖父より。今己の翁に及べるまで。
備りもあらバ人も居ぬ家に在る物の失ぬハ。実に有がたき
君が代の恩恵こそ尊とけれ。然へあれども其むかし。聖代之と
称へる。延喜天暦の御世にても悪人ハ絶えざりしとなん。されバ今の
御世とても盗心のきざしのあらバ。然るに窃盗無頼の族も。命惜ね
者のなけれバ。此の大家に忍寄して盗心も失ひしなりけんと。かの雄士
へ縁つなぎよりも法も推挙しの恭さを懐きて。己が家に
卧そのまゝ。日中にても為き眠り。広き納に伽羅を捕理して
残りなきにて出て夜を明さぬ者もなけれバ。帝中表裏明家と取

てこまと護まる人さへあらねど。盗人些細せざるとつへえて。何方にても物一箇。竊まれうりとりえを訴ば。場所によりてその便座も。三町隔ちーありまゝ是よりも程近ある方へあまどども銘々に其門邊に在にあらねば。夜の間に来り盗み家財雑具で奪ふとも。誰咎むるものもあらんを。邪家毎に主となる人は実におの雄士がいへるごとく。賊るも恐怖せらるゝべし。然をまとより四五日を經て。六日七日の比なりけん。今夜かあらバ津浪ありて荒る濤ハいふにおよばず。大川にも逆り。神田明神の坂下まで潮大に来るべしと。誰いふとなく流言し。人々恐懼に魂も。消えざる人々等是を聞より前後をも忘ひ闘ひなどして虚を以て虚を傳ることに於て無智の小人婦女小兒の輩ハ周章ひて力に換ふ資財を負ひ或ハ荷ひて高き方へと立さることを欲すといふ人

としらば。通智量ある人の教してさることあるべからば。心を安んじ止まれと理を説諭せど深ぎこ五時の勢ひ判じずて聞て恐く。立避るも由解なくらば。然りといへども救てすりなし。其下降て途ある流言あらんと早覚り。怖ぞこ怯ずくこち帰り。又重べその宅不資賊雑具奪ハもし右も多くありしとぞ。必ず不誠なるその治め。人々仮屋に在し空しく過して遺憾にそひ巧こそ箇格の流言なし。人の立避るを窺ひて忍不竊ことしあるべし。是等のことも豫てよりよく心に恐おれて。いかなる変災の風説ありしとも。その理を熟識なし。真偽を篤と考へて。その言に惑ハざることそ才知ある人といふべけれ。それ津浪ハこの本の前巻にもいへる下に記震れよりて海汀の淤泥涌きより黒液を出て暫時陸へうち揚るを。喩へば盥に水を湛へおきてこれを揺動すそれに緩けれバその水の揺

るとも未だ緩し。迫つて烈しく動きて時は揺るとも未だ烈ならず。その
水盤の外に溢るを泝る威勢は、とも彼津浪と同理なり。されば大
震あらば後に入日を経て海水の泝るべき理なし。その理なければ其
の事あらんとて、それを偽の流言なると察すべし。さらば是程の浅智
愚蒙の者とも、只とも知らざる事なし。但其下懼るゝことの甚しければその
智昧こそ。かく浅猿きすべなきも察知せざるものならん。其余は惟いへど
なく今宵は如何ならん大震あり。翌は極めて最初に勝る大地震
ありといひ罵る体。余が知己にて常によく物を察知する士人ありしが。
このことをいひ出て天下に在る人とりて。いそしむるの常なきあり。この須臾
夜となく微動あり。加之猶に方を瞻やも朦朧として晴やかならん星の
色も見めくといふも沈衰の兆を含む。この風説も根なきにてもある

ぎるべしと恐れて動るに然るにその後外へ出し鄙人の言に老猫どもあまた五個集りてこのことを語り居るに一人の老猫がいふやう此度大地震といふは何人のいひ出せる談しかしらんといひければ今一個の老猫答へて云ふ一天文に精しき人のいひ出せることなり油断すべからずあらんとのへば又一個の老猫冷笑ひよしや天文に精しとも何とてそこまで知らん倫識に識とある笑為そ最初のそれそのことてわずして多くの人を過せし者にてざることとまを語りて止ふやう余傍にこれを聞その老猫か蒙昧の鄙人とつ見あざる彼士人に競ぶれば識量大に高るなりけりと微笑してありことあり然れば人は一言半句のことによりて識量ても大に察せらるゝものなり余が先年著しる虎と驢馬とが說のごとくよく合へり合せべし按るにこれと限らず或ひは大雷或ひは大犬などにて人の心を攝する。

時にあたつてまた何時幾日。また大雷大火あらん。これ神の託宣也。亦某の社の巫覡が。卜占し祈りなど囂しき事いひ罵るまゝ。その[illegible]あしとなす。然るに是等の妄言を信ずる人強ていはく。この託宣あるによつて。何方の名僧にまれ祈つて天雷を遠ざけられ。また大災は人々の心を著て護りし由縁に。この難を脱れりといひのべて為に人も多し。是等の人々争ひて。香を費す。畢竟無益の所為あづらく試ふことをいそで雷は陰陽の撃する処。祈るとも何ぞ避べき。但菅神天雷となりて。京師に祟んとなせし前叡山に座主法性房によりや勅ありとも祈てのましとある。尊意答へて率土の濵王臣にあらざるなし。勅命下らば争か祈らざるを得んといへば。菅神怒りて其処にありし柘榴を取て口に含。

倚ある杉戸に唾ける。稲福忽ち火焔となりて杉戸燃んと
しけるを法性房印を結び。これを鎮めけりといふこの事元亨
釈書に見えて。人のよく知る所。但信偽は解しがたし。かゝれバ名僧
天雷を祈るところといへるにも然れどもこの事ハ古人も多く論
説を立て。種々ありしとあり。まゝ人々の護りにより火災あるべしと
いふとも。一応の理といふべし。然なくとも失火ありて家産を失
ひむけきハ。令を失ふも亦宜べ。人として火の元を護らざる者あ
といへども時として大火あるハ。実に天の命数あるか。明の謝肇淛
が上元の燈の條に火災ハ自令数あり。士女の遊観ハ太平の象
云々といひしとりて察ふべし

○地震の前後地脈狂ふの條

およそ大地の気和ひ。陰気上にありて陽気を閉ときは。陽気まさに下に伏せず。発出せんとするにおよびて。地おのづから脹れあがること。咎係を暴るごとくなりしとぞ。既に前にも録しあり。かく地中動くにより。地脈おのづから和ひなり。因て井の水或ひは増。あるひは減じて常にかはる。こゝに去年十月二日。大震の前なりしが。浅草田甫前に福田屋といふ水茶屋のありけるが。駕に乗りて来る人あり。轎夫庭を徘徊するに。少し凹たる所あるを。何心なく杖にて突に。忽地清水滾こと。湧出て流れければ。主人これを見て大に驚き。是よりてその傍を穿ちしに。いよいよ清泉湧出れば。人々これを奇なりとて。競ひ来るもの市をなし。主人は桶の底を抜き。是を覆ひて井のごとくし。汲とりて茶を煎じるに。その味ひまことに美なりとて又好く人毎に。なべて不測のことあり

といひて。地脈の狂ひしに心ハ著ん。然るにもとより旧八月を過て。かの大震ありしなり。其後諸方の風説をきくに。ある人ハ井の水常よりハ通きこと半に過ぐといひ。また遠きこと倍なりといふ。これを以てこれを考ふに。地脈くるひそれるの。差ひぬること疑ひなし。されバ福田屋の庭井に暴に清泉の湧出しも。先に地震の前兆なるべし。余近頃其水とみに青く濁りて苔を生ず。まつたく飲に堪ず。是よりまた数月を経バいかになるらん。知るべからず

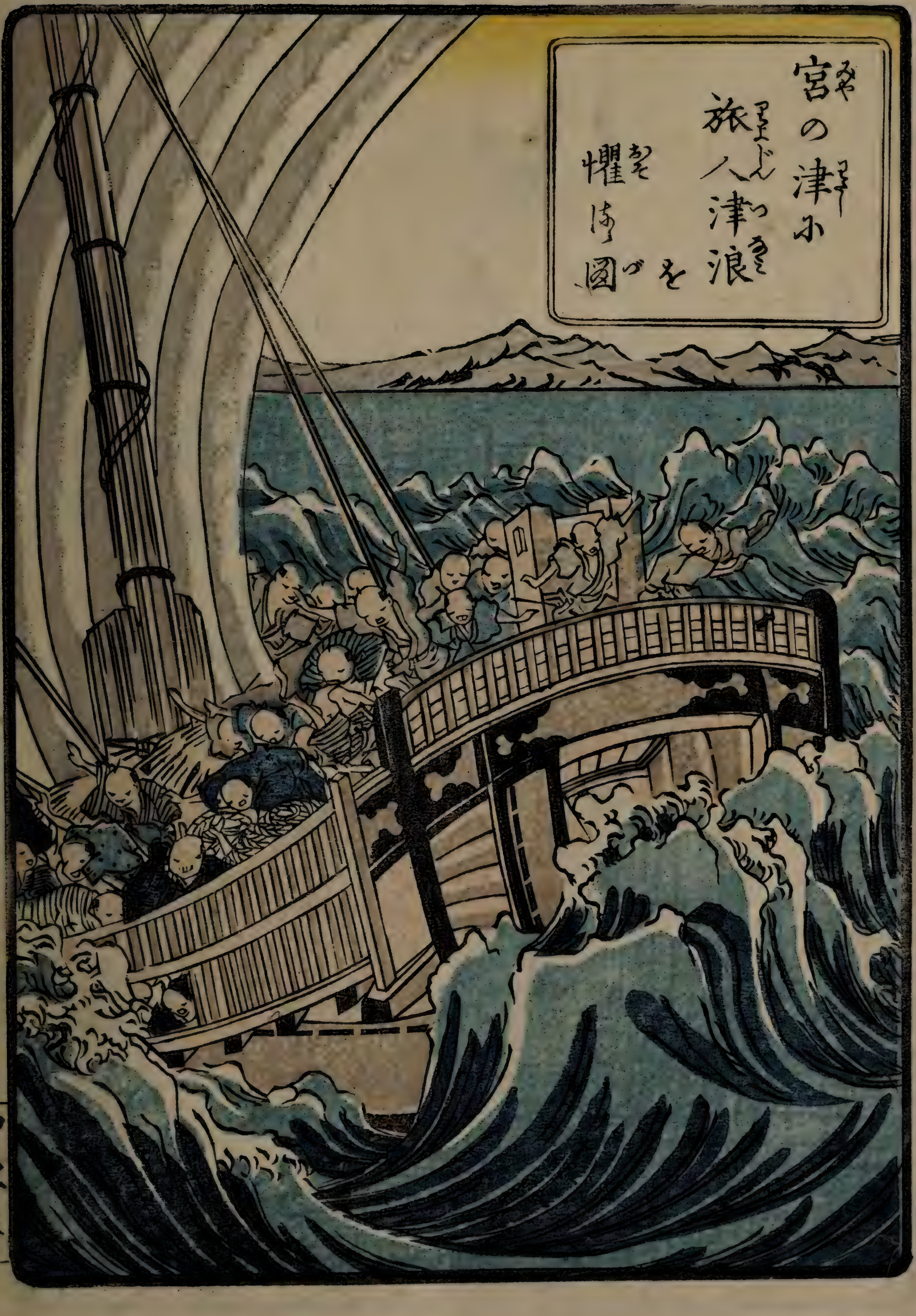
因にいふ。この時にあたり。安房国の海浜潮干ること。常に競ぶれバ三倍せり。故に汀に遊ぶ小児等。歓びてその干潟に出て。砂を穿ちて貝を拾ふ。遍く引き残りたる潮の中に。鯒鰈など躍りてあまれバこれをとらんと若もの等。こぞつてその干潟にあつまりて。魚を捕

て夜すがら夢に一老人ふと来り。急頓に山に登るべしよ。さなくハ命を失ひなん。と夢を醒れバ夜びけ是非其故へ知らざれど。老人の夜ぶまゝに。ともなひ連て山へ登り。つらつら見れバ遥々我々をよびしと問ふ。老人回答てされバよ已に遠きと見えし潮大に干ることあり。其ハ今日の容に似たり。常に稀なる事とて見べきこそ歓びて干潟に出貝を拾ひ魚を捕大に興を催し ける時潮暴に逆巻来り。干潟にありしもの一人として一命の全きのところ。その騒をきゝ遁せしものなし。と是所謂津浪なり。此津浪来んとするとき潮干分沖へ引え。その来るとき猛烈にて。是を避るにいとまなし。委しくと告しけるが。その図をまづ終られ。澳のうへ真黒になり。数十丈とも目量りがたく。小

山のごとく潮逆巻逆りて岸を浸し。その浪餘数町を溺て。山の
裾を撃せる事。天地に害をなして怖しきなどいへ絶もなかりし。是
どうして若老は大に驚き恐れつ。ありしこの老人なりせば。此海
底の水屑となりなんを助けられしぞ。嬉しきと老人をふし拝
めり。と或人の語りしが。是尺蠖の伸んとて暫時屈するに同
じ理にて。海潮暴に逆くとも。又まさに暴に来らんを察し。其
難を避べきなり

又ある余が友の知己なる人所用ありて東海へ登りしに。嘉永七
甲寅十一月五日帰路にあたり桑名の海を航つとせるに海岸の方
どうなりしが。その音は聞えねど並松ざわ〳〵とゆらぎて枝ら交へ
して動くさまなり。抑什麼大風にやと舟人ど海上は穏なり。枝に苦あり

組の者ども等狂りて一同にこれをとゞめんとすれども不暴不測の夜来悪くなりけり。今又何方も見えねば是迄はかゝる怪異あらんと騒ぎたちぬ者もあり。其時船長客にいふやう。是は必津波なり。今や遁るゝ道なければ人々覚悟しのよといふ。彼人聞て大に驚きしといへどもしてかゝる難を脱るゝことあらバ教てよといふに船長臥とふり決して是を脱るゝことなし。たゞ天命に任すのことと答へて彼方を向とみえる。彼人今はこれまでなりと所持せし物のうちにいと貴く大切なるを懐に括して覚悟なす。折から潮濤くと鳴来て逆浪のうち返ると思ふ所に乗たる船底逆浪の撃する音して二三丈船は虚空へ閃めき昇り。暫くして撞と落れバまた逆浪に撃せられて昇ることを初めのごとくかくすること以上五たび。船中の人々皆


宮の津に
旅人津浪を
懼る図



活る心地なく。砕るが如く痛るが如く。偏て弥陀観音の名号をまど称ふるものあり。稍あつて海上穏かなり。船僥倖に恙なく向ひの岸に着けれバ。船中蘇生たる思ひをなし。悦びあへる限りなし。かくて熱田の駅に上りみるに。こたびの大地震にて。家ハおしなべて揺り崩し。或ひハ梁棟に壓され泣叫ぶ男女の声耳を貫ぬき膽に應ふぞ。それこの地震によりて海上津浪せしものなれバ怖ろしかりけるが。今この害をのがるゝに及び。かゝる変災に遭んより。海上に在しさへ遥勝りし洪福なりきと自その身を祝しぬ。されど近けれバ熱田に詣て将来を祈らんと路を枉てかの社へ詣でけるに不測なるかぞの駅より宮の程僅八九町の傍にして。官舎がしも損ずることなく。社壇に捧し挑燈の火さへ消ことなりしとぞ。

実に神霊の貴さと心に銘じて感涙を流し。暫時祈念してたち
去りぬ。まさえの沢に出たるより次第に下りけるが道筋すべて泥
泥を吹出し。泥に辷りて歩行がたく。人家は一宮に倒れ損じて
食を索むる家もなく。舎るべき方もなし。江都までは猶遥け
きふりかゝりて濁り苦ん。とるべくもなく心細くて身の力ぞ抜え
てたゞ右左して漸々に飯を索め夜に入りぬれば崩れ残りし家に
宿り辛うじて帰府なしけりとぞ。手道まがく雑義せし物語の
多けれど。繁き故にこれは略せり

この地震のとき余が知己なる中山何某といへる人。遊歴して駿河
に居たりし。この者は海道にても別て地震の厳しきと聞きり。その日巳
刻ごろ中山氏。外の方に立ち出て人と物語なし居けるが。彼等地

震よといふ声もあらば。両足痿て蹶と倒れ。起あがらんとすけれども。かの小児が戯れにする。傀儡びと又は斜一に縛ごとして立と雖し。文下泥中より炯のごとく。沙のごときの吹出て満面を打るなどれ目にぶふ開きぬれば。心昏瞑して前後もしらば。漸くして揺静まり漸く心地はまれ返り。起上りて四辺をみるれ家ここふ斜しく崩れ倒れて。在し容ふ似もつかぞ。四方に人の泣声ききえて。三生あぶる叫喚地獄へ堕しのろとあやまるまれ。心を静めて篤とみるれ。いつぞ家も崩るそのところ三尺だかり地中へ陥り。衣類調度も何方にあるる。屋根壁崩まれて覆ひねまれば頓に出さんやうもなく。只管に呆れ惑ふ一圓那のごとくなまれば。一夕の米もなく。とまれ炊く器さへこれぶ地中に埋のまれて。いるふとも絵方なし。殊にこの事

の井迄崩れたり。但し崩れざるも泥吹入て更に飲べきやう
もあらねバ人々飲食を断れたり（その頃江都の地震烈しけれども。かくだろの／るべあらバ。但し怪我人の他方より聞しまへ土地
（不人の難ぎが／患のこと）かくてその翌月に至り。邑の荘屋諸方を募り。漸くにし
て来ると得つ。粥に煮て施しけれバ。始めて喉を潤せり。その中山氏
もその翌日。粥を饗へし人来到ありしとぞ
此の頃後府に居たりける。余が親族の僕由蔵なるもの。此地震
のことを語りしときに。彼驚地震とりく程こそあれ。蔀格子も
たちまちにめりめりと破れ損け。戸障子倒れ揺されの東柱一時
に倒れて外に出んとすれど足も立ズ。漸くにて跳び出しが。頻に
震ふと驚しけれバ。傍にある大木の。やがて一抱もあらんとするに。
抱き著しにその大木の。幹大に揺はふようで手を放さることえぞ




甲寅の十一月
駿河の國大地
震により泥水
をふき出を圖

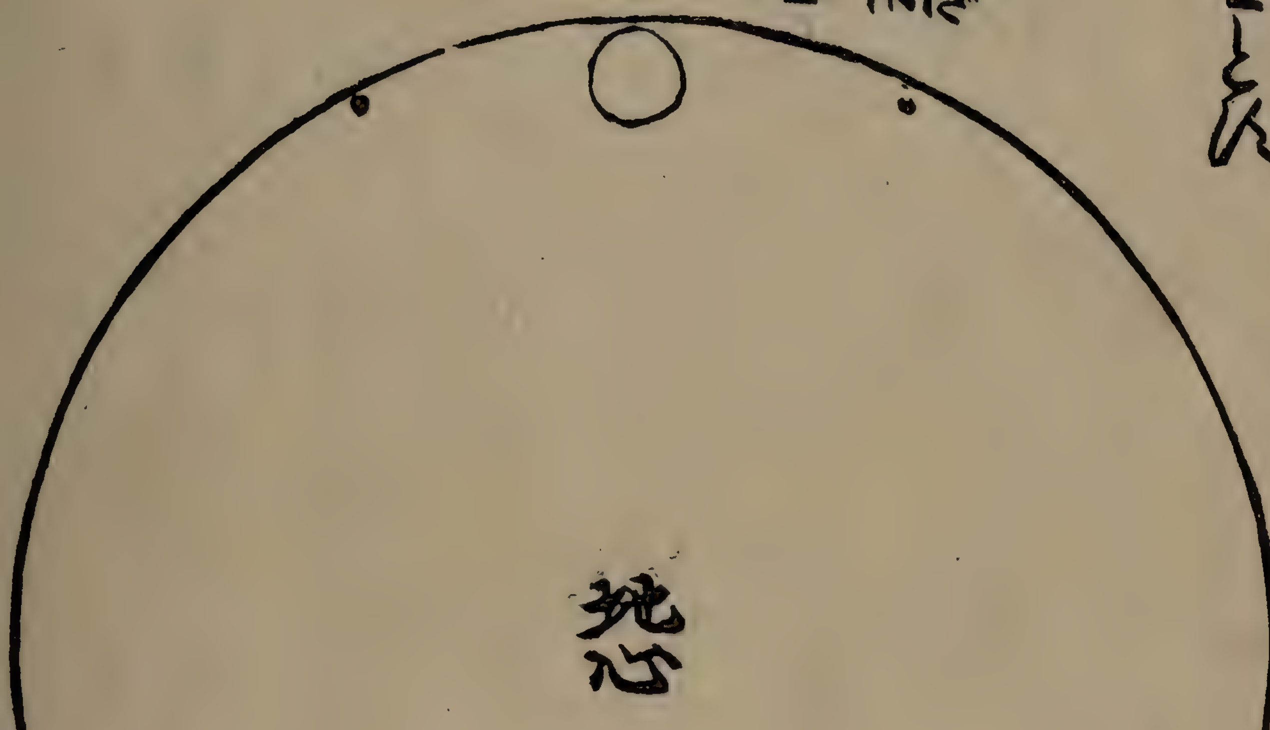
見しぞ宜なるかなこの大木揺まで。伏せしたる枝地上に着き。仰ぐときハ半天に至は枝に遮てこの幹にあるまゝバ身體微塵に成べかりしにその危ふき雲ふるにはのまゝし。然るに幸運にして。その恙なきことを得ぬ。也に地上に投びしもの八さつに起上ぬと悩みぞ。其の下大地大に裂て。泥砂をふき出せバ。遍身泥に塗まとて面目を分ことぞ。震止て漸くに起上るといへども。忽ち眩暈て行歩かなはず大に悩る人のごとし。然るにおよそ半時ばかりにて漸揺返しの来ることに初めて驚きぬればやゝ緩柔し夫より時々刻々に震ふことを数を知らず。周ておもふに江都の地震。さしも猛烈なりといへど。後府の地震を十分とするときハ。七分ばかりにや有ぬらん。いと怖しきことなりしと語りき

○地震の方角をいふ条

凡そ地震する時ハあるひハ東より震来るといひ。また西より来るといひ又南北もまた然り。さまざまその起る所何方なるやとおもひ慮るに雷のごとく一所より発して里を裏なる人のゆへあるべし。古書に云く。地球一周九萬里なりと是唐土の説なるべし。六町をもて一里とするなるべし。是を日本の一里三十六町にて一周一萬五千里とする。さすれバ其地心より地上まで二千五百里ハ当るなり。然るハ和漢古今の地震ハいとはげしきといへども。その響の甚だ至る所。大抵二百里四方ハ過ず。江都の地震なども百里四方にもおよばざるなり。この廣大なる地球に於てこの微少なる地動のごとき。東西南北より来るハあるべし。震する所ハ一所ありて夫より四方へ響き合せるなり。その微動の所を求しまで。今試ことごとく次に図を

こゝを地球として周廻凡そ一萬五千里とすこの地心とある所より上まで凡三千五百里とす

この黒點の間凡そ一千五百里この小円凡そ二百里四方にあたる



右の圖するごとく。二百里四方を裏うん大震は。和漢古今にありや

なしや。その大震といふ物のごとし。況やその微なるに於てをや。前にもいふごとく。その地は起り。それより四方へ響くものなれバ。来る方角のあることなし。但その心は強く。その端は次第に緩し。しかれバ今般江都の地震ハ。江都を心とするが如し。その中にて浅草より。本所深川を心となし。山の手のうち市谷牛込大窪の辺りを端とし。江都は元地震稀にて元禄十六年の大震より。百六十年ばかりを経たれバ。知る人さへ稀なり。云伝へをだに知るものの寡し。まして繁華の地なるにより。火災ハ往古より度々あり。因て火を防ぐの備へをなし。人々厳重に心を籠むれど。地震の事には心を用ひず。因て這回の天災は。死亡の者も多かりける少く。是より以来心ある人。家作及び住居の地。よく撰ぶこと肝要ならん

安政見聞録巻之中 終

